

令和4(2022)年11月1日

日本シェリー研究センター会員各位

日本シェリー研究センター 第31回大会のお知らせ

澄みきった空に秋の深まりを感じる候となりました、会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

今年も、日本シェリー研究センター年次大会のご案内をする時期が参りました。第31回大会を、12月3日(土)13:10より**帝京大学八王子キャンパス**で開催いたします。

今年の大会では、英国ダラム大学よりマーク・サンディ教授をお招きし、特別講演をいただくこととなっております。併せまして、今回は研究発表という新しい試みも企画いたしました。

数年にわたる新型コロナウイルスの感染拡大もようやく落ち着いてきた状況となり、また今年はシェリー没後200周年の記念大会であることに鑑み、幹事会で協議を重ねた結果、今回は対面とオンラインのハイブリッド(ハイフレックス)方式で開催することにいたしました。大会会場で、またオンライン上で、活発な意見交換を大いに期待いたしております。充実した大会になりますよう、どうぞよろしく願いたします。

それでは、当日皆様にお会いできることを心より楽しみにいたしております。

日本シェリー研究センター会長

木谷 巖

Zoom を利用したハイブリッド大会開催に関して事務局よりお知らせ

感染症流行などの状況を鑑みまして、今年度は対面とズームを併用したハイブリッド形式で年次大会を開催いたします。プログラムに先立ちご案内申し上げますので、ご一読のほどをよろしくお願いいたします。

ハイブリッド大会開催について

年次大会は、対面とオンライン会議システム Zoom を併用して開催いたします。Zoom ミーティング情報の詳細は、後日メールにてお知らせします。その際、会議が行われるサイトの URL 並びにミーティング ID 番号、パスコードをお送りします。日本シェリー研究センターにメールアドレスの登録がない方で Zoom 大会への参加をご希望の方は、11月18日（金）までに詳細送付用のメールアドレスを細川 (hosokawa@g.matsuyama-u.ac.jp)にお知らせください。その際、件名は「22年度大会参加希望」としたうえで、会員の方はお名前、会員でない方はお名前とご所属をお知らせください。Zoom ミーティングへの参加方法に関しては、以下のリンクをご参照ください。

Zoom ミーティングに参加する方法

<https://zoom-japan.net/manual/pc/join-zoom-meeting/>

事務局からのご案内

1. 開催方法変更の可能性について

新型コロナ感染拡大の状況を鑑みて、対面とオンラインを併用するハイブリッド大会から完全オンライン大会に変更になる場合があります。その場合には特別講演者はイギリスからの参加となりますので、時差調整のため大会進行は変更されます。完全オンライン大会になった場合の大会進行を含む詳細は、変更決定次第日本シェリー研究センターHPにてお知らせいたします。

2. 出欠確認について

11月19日までに、大会への出欠と出席方法（対面 or オンライン）を、大会プログラム担当の新名（m-niina@msf.biglobe.ne.jp）までお知らせください。

3. 会費について

会場で会費を納入することはできません。会報とともに送付しております振込用紙をご利用いただくか、下記の振込先へお振込みください。よろしくお願いいたします。

振込先：ゆうちょ銀行 00190-0-661999 日本シェリー研究センター

4. 会場費について

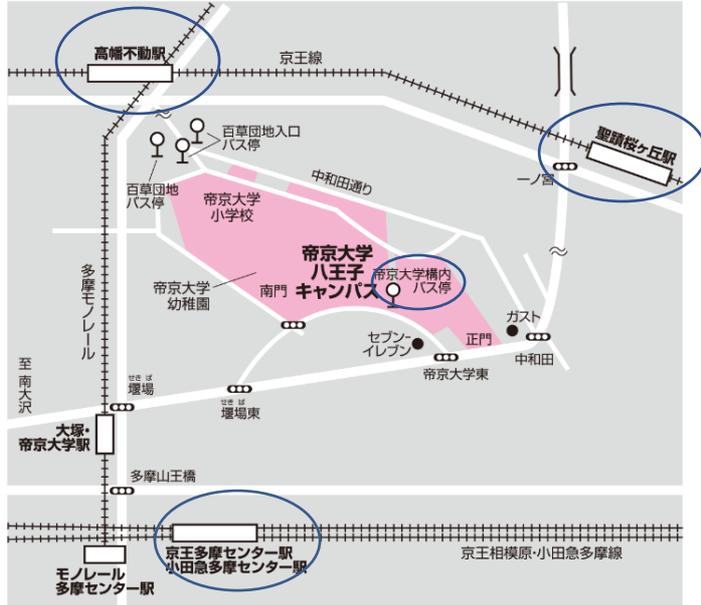
会場費は無料です。お誘いあわせの上、ご来場ください。

5. 懇親会について

コロナ感染症について、大会当日の状況を予測することが困難なため、今年度は懇親会は開催しません。大会当日の状況に応じて、安全に配慮して少人数のお食事会をお持ちになる場合は、各自のご判断にお任せいたします。

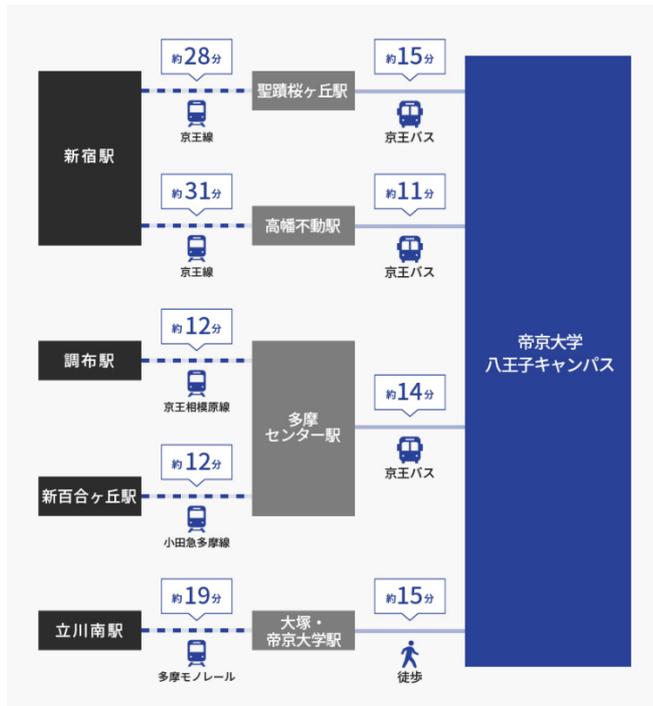
帝京大学 八王子キャンパス ご案内

大会会場：帝京大学八王子キャンパス ソラティオスクエア 4階 S421 教室



※大塚・帝京大学駅からは15分程度歩くため、丸印の駅から大学構内行バスのご利用をお勧めします。

アクセス



「帝京大学構内」行バスの種類

- ・聖蹟桜ヶ丘発：桜87 [京王バス]
- ・高幡不動発：高23 [京王バス]
- ・多摩センター発：多16 [京王バス]

※詳細は帝京大学ウェブページをご参照ください。

<https://www.teikyo-u.ac.jp/campus/access/hachioji#head2>

※都心の密を回避したい方へ、都心を通らない経路のご案内

- (1) 「大宮」から、武蔵野線「西国分寺」・中央線「立川」経由で、多摩モノレール多摩モノレール「大塚・帝京大学」で下車し、徒歩（15分程度）。または、武蔵野線「府中本町」・南武線・京王線「分倍河原」経由で、京王線「聖蹟桜ヶ丘」で下車し、京王バス「桜87（帝京大学構内行）」に乗車。
- (2) 「新横浜」から、横浜線「橋本」・京王線「京王・多摩センター」で下車し、京王バス「多摩16（帝京大学構内行）」に乗車。
- (3) 「新横浜」から、横浜線「町田」・小田急線「新百合ヶ丘」・「小田急・多摩センター」経由で、京王バス「多摩16（帝京大学構内行）」に乗車。もしくは多摩モノレール「多摩センター」で乗り換えて「大塚・帝京大学」で下車し、徒歩。
- (4) 「羽田空港」から、京浜急行「品川」・「東神奈川」経由で、横浜線「新横浜」（これ以降は上記（2）（3）へ続く）
- (5) 「羽田空港」から、「南大沢駅」行き高速バスで「多摩センター」で下車し、京王バス「多摩16（帝京大学構内行）」に乗車。

日本シェリー研究センター第31回大会

日時： 2022年12月3日（土）13:00 受付

場所： 帝京大学 八王子キャンパス ソラティオスクエア4階 S421教室

*例年の霞が関キャンパスとは違う会場です。アクセスについては上記のページをご参照ください

シェリー没後二百周年記念 特別プログラム

1. 13:10 開会の辞 会長 木谷 巖
2. 13:15 研究発表 野間 由梨花
司会 細川 美苗
3. 14:00 2022年度 シェリー没後二百周年記念シンポジウム
『『ここに私を生かし、死なせたまえ』——シェリー夫妻とイタリア』
司会 木谷 巖
パネリスト I 市川 純
『ヴァルペルガ』、マキアヴェッリ、ロマンス
パネリスト II 鈴木 理恵子
P. B. シェリーとメアリ・シェリーの作品に見られる共和制について
——“Sonnet: Political Greatness”と『ヴァルパーガー』を中心に
レスポンス 木谷 巖
メアリ・シェリー「選んだもの」の叙情性
——『アドネイアス』との比較をもとに
4. 15:50 特別講演 Professor Mark Sandy
‘Dim Mirrors of Ruin’: The Myth, Memory, and Mourning of P. B. Shelley’s Death
司会 木谷 巖
5. 16:50 年次総会 昨年度分会計報告・役員改選・その他
共催 科研研究基盤 (C)「イギリス・ロマン派二世世代詩人の死と神話形成」(課題番号 22K00397)

研究発表

“The Mortal Immortal”における愛・女性の美貌・結婚 —Mary Shelley の他の短編小説との比較において—

野間由梨花

19 世紀イギリスで流行した、年に 1 回発行される定期刊行物は、1822 年に初めて出版され、多くはクリスマスギフト用に売られていた。ターゲットは裕福な中産階級で、読み物としてだけでなく、「見られるもの」としてデザインされていたことから、とても高価であった。また、編集には女性が関わることも多く、こうした雑誌の主要な消費者は女性であった。Mary Shelley は、1820 年代から 30 年代にかけて、ギフトブックや定期刊行物に 21 編の短編小説を残している。そのうちの 16 編を、1850 年代まで出版されていた *The Keepsake* に発表している。*The Keepsake* は最も成功した定期刊行物と言われており、その装丁も魅力的であった。本発表で取り扱うメアリーの短編小説は、全て *The Keepsake* に発表された作品である。“The Mortal Immortal”は、主人公 Winzy が思いを寄せる Bertha との関係に悩み、不死の薬を飲んだことによって、永遠の若さと命を得るといふ物語である。本作品において、不死の問題は物語の一つの大きなテーマであると言える。しかし、同時に注目すべき点は、女性登場人物の存在であると考えた。メアリーが、当時の女性を取り巻く問題について、作中にどのように表象していたかを、彼女の他の短編小説と比較検証することで明らかにしていきたい。それぞれの短編小説内で、女性登場人物の置かれたシチュエーションや、抱えている問題を比較することによって、メアリー自身が当時の女性をどう見ていたかという、根本的なイメージを考察することができるのではないだろうか。

(のま・ゆりか 武庫川女子大学非常勤講師)

シェリー没後二百周年シンポジウム

『ここに私を生かし、死なせたまえ』——シェリー夫妻とイタリア

『ヴァルペルガ』、マキアヴェッリ、ロマンス

市川 純

マキアヴェッリがカストルッチョ・カストラカーニを理想的な英雄として「カストルッチョ・カストラカーニ伝」(1520)にまとめた一方、メアリ・シェリーはむしろその暴君としての側面を『ヴァルペルガ』に提示した。これは今までの『ヴァルペルガ』研究で示されてきた見解としてある程度の一致を見ている。が、その際に参照される『ヴァルペルガ』の序文やマキアヴェッリの著作の位置づけ、ロマンスや歴史記述の捉え方については相違もある。この乱麻を断つとまではいかなくとも、少しでも解きほぐすため、両テキストとその周辺の言説をロマンスと歴史記述という視座から検証する。

(いちかわ・じゅん 日本体育大学)

P. B. シェリーとメアリ・シェリーの作品に見られる共和制について

——“Sonnet: Political Greatness”と『ヴァルパーガー』を中心に

鈴木 理恵子

P. B. シェリーの詩を政治的観点から解釈することは、今となっては、お馴染みの手法となったといえよう。また、シェリーに続いて注目されてきたメアリ・シェリーの小説解釈に至っても同様な事がいえる。本発表においては、各々別々になされてきた解釈を繋げるべく、シェリーの詩とメアリ・シェリーの小説を一緒に講読してみたい。シェリーの詩に関しては、複数存在する“Sonnet”の写本考察から一連の詩がどのような歴史的背景を反映しており、結果として、シェリーの考える共和制がどのようなものであるかについて論じ、また、メアリ・シェリーの『ヴァルパーガー』については、いかにシェリーの“Sonnet”が『ヴァルパーガー』執筆に関係しているか考察したい。

(すずき・りえこ 早稲田大学)

メアリ・シェリー「選んだもの」の叙情性——『アドネイアス』との比較をもとに

木谷 巖

メアリ・シェリーの詩「選んだもの (“The Choice”)」がどのジャンルに属するのかわについては、「選択の詩 (Choice poems)」、「名婦の書簡 (the *Heroides*)」、「哀歌」などの解釈がこれまで出ているが、本発表では、“choice”を語源とする「牧歌 (eclogue)」に着目することを起点に、この詩を亡き夫 P.B. シェリーの『アドネイアス』と同じ牧歌的哀歌 (pastoral elegy) の変奏とみなし、とくに、幼くして失った息子ウィリアムを偲ぶ場面が『アドネイアス』からの引喩とおぼしき技法を用いながらもメアリ特有の詩情を湛えている点について論じることで、その詩的特徴に迫りたい。

(きたに・いつき 帝京大学)

特別講演

‘Dim Mirrors of Ruin’: The Myth, Memory, and Mourning of P. B. Shelley’s Death

Professor Mark Sandy

Durham University, UK

Reflecting on the implications of P. B. Shelley’s epitaph, taken from Shakespeare’s *The Tempest*, ‘Nothing of him doth fade / But doth suffer a sea change / Into something rich and strange’, this lecture attempts to disentangle the reality from the myth of the events surrounding the poet’s death and cremation. To what extent do nineteenth-century accounts, say, by Edward Trelawney and Leigh Hunt, mythologise or testify to the circumstances of Shelley’s drowning, the discovery of the poet’s washed ashore body, and its subsequent burning? Sifting the myth from the reality is instructive about both Mary Shelley’s role as literary editor and executor in her Preface to her husband’s *Posthumous Poems* (1824) and his poetic reputation in the late nineteenth century.

Exploring the myth and reality of Shelley’s death also offers further insights into another compelling and haunting aspect of the poet’s mythification: Shelley as a prophetic self-elegist of his own demise in his letters troubled by fears of drowning, his elegy for Keats, *Adonais*, and his unfinished *The Triumph of Life*. Through an evocation of Dantean imagery Shelley’s *Adonais*, for instance, closes with a hopeful yet perilous voyage towards the ‘abode where the eternal’ reside. Such an existentially treacherous, poetic, voyaging out is equally charted by Shelley’s own self-allusion to ‘Ode to the West Wind’. Shelley’s lyric is another of his visionary poems which is, like the fragment of *The Triumph of Life*, written in Dantean metrics (*terza rima*) and meditates on questions of posterity. Crucially, then, Shelley’s own mythmaking, as much as the mythification of the untimely events of the poet’s demise, have helped to shape the posthumous reception of Shelley’s poetry in the nineteenth century and beyond.